

佐賀県研究成果情報（作成 2026 年 2 月）

[情報名] 水稻中生品種「ひなたまる」における刈取適期の判断基準を策定した

[要約] 水稻中生品種「ひなたまる」の刈取は、出穂後の日平均気温の積算温度は 1,000～1,200℃の範囲で、籾水分は 26～18%が適する。この際の出穂後日数は 38～47 日である。

[キーワード] ひなたまる、刈取適期、安定多収、積算温度、籾水分、出穂後日数、黄化籾率

[担当] 佐賀県農業試験研究センター・作物部・作物栽培研究担当

[連絡先] TEL 0952-45-8807・メールアドレス nougyoushikensenta@pref.saga.lg.jp

[分類] 普及

[部会名] 土地利用型作物

[専門] 栽培

[背景・ねらい]

水稻中生品種「ひなたまる」は、令和 7 年から本格的に作付けが開始されたが、刈取適期は暫定基準で、今年度においては「さがびより」の刈取適期と近接する事例も発生し、混乱を招いた。よって、玄米の外観品質が優れ、安定多収できる刈取適期を明らかにする。

[成果の内容]

1. 出穂後の日平均気温の積算温度(以下、積算温度)の上昇に伴って収量は増加し、積算温度が 1,000℃以降になると増加程度は小さくなる。積算温度 1,150℃付近で最大収量に達し、その後の低下は小さい(図 1)。
2. 積算温度 1,000℃頃の黄化籾率は年次変動が大きく、黄化籾率による外観での刈取判断は困難である(図 2)。
3. 外観品質(検査等級)は積算温度が高くなっても低下がみられなかった(データ略)。
4. 青未熟粒及び青死米の割合は積算温度が 1,000℃以降に 5%以下となり、胴割粒及び碎米の割合は積算温度が 1,200℃以降に増加するため、積算温度の早限は 1,000℃、晩限は 1,200 と考えられる(図 3)。
5. 刈取は、積算温度が 1,000～1,200℃で、その際の籾水分は 26～18%頃が適する(図 4)。

[成果の活用面・留意点]

1. 佐賀県平坦部普通期栽培に適用できる。
2. 本成果は 2020～2025 年において、移植時期 6/17～6/24、施肥量は基肥 4 kg、追肥 2 kg、穂肥 3 kg (kg N/10a) で実施した結果からであり、その年次の出穂期は 8/24～8/28 であった。
3. 黄化籾率は年次変動が大きいため、外観だけで判断できない年もある。そのため、出穂後日数及び籾水分と合わせて精査し、判断する。
4. 積算温度 1,000～1,200℃の出穂後日数は 38～47 日である(データ略)。

[具体的なデータ]

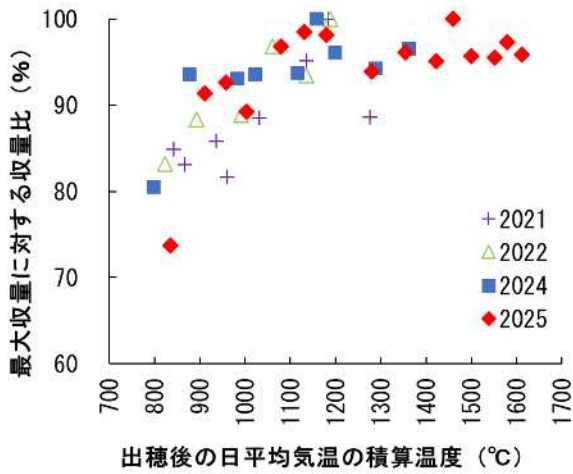


図1 最大収量に対する収量比と出穂後の日平均気温の積算温度

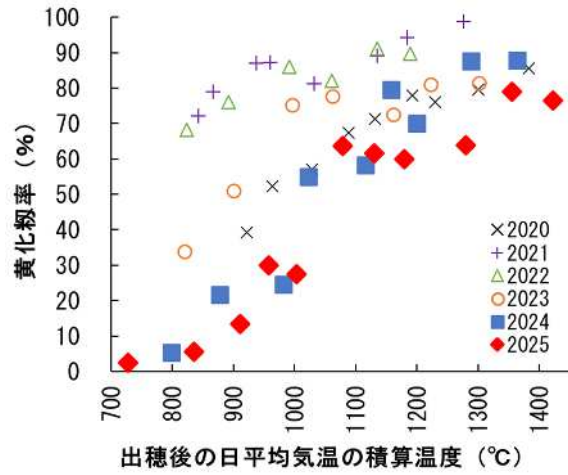


図2 黄化率と出穂後の日平均気温の積算温度
注1) 黄化率は稔実粒数から計測。

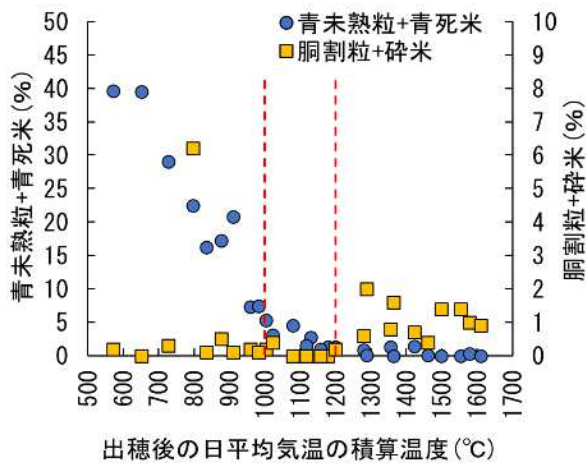


図3 被害粒と出穂後の日平均気温の積算温度
注1) 穀粒判別機(サタケ製 RGQI110B)を用いて、2024～2025年産玄米を測定。

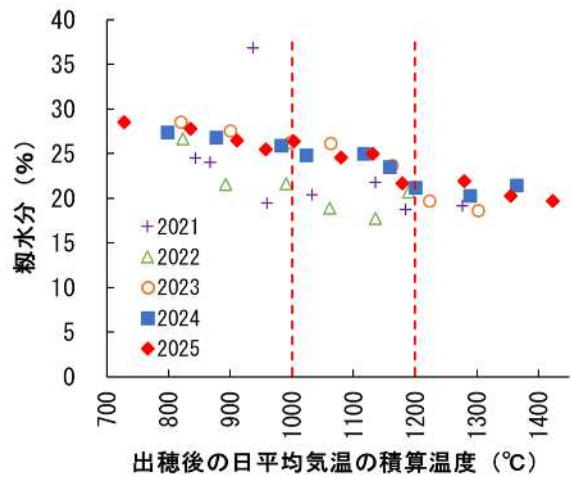


図4 籾水分と出穂後の日平均気温の積算温度
注1) 籾水分は米麦水分計ライスタ f2(kett 製)による測定値。

研究課題名：需要の動向に即した水稻・麦類・大豆新品種系統の作柄安定化対策試験

予算区分：県単

研究期間：2020～2025年度

研究担当者：相川倫子、岩城雄飛、崎山将太、居石奈々、西岡廣泰、秀島好知、森敬亮、田村直樹、河野太祐